

ため息の難民政策



石山 絵歩

「収容施設に何年も入り、精神的に追い詰められた難民を何人も見てきた」——。日本政府が入管法改正案を閣議決定した

3月、オーストラリアで、移民・難民コンサルタントをするリビー・ホガースさんから話を聞く機会があった。移民が国民の4分の1を占める豪州は、難民政策も「寛容」だろうと考えていた私は、ホガースさんの話に驚いた。

南オーストラリア州で長年、移民や難民と関わってきたホガースさんは、私の見解に逆に驚いたようだ。「特にボート難民は、人生を翻弄ほんろうされてきた」

豪州では1990年以降、アフガニスタンやイランなどからのボート難民に関し、政権交代のたびに政策が変わった。ボート難民の本格的な受け入れに消極的だった保守連合政権下の99年は、臨時ビザを発給して対応した。その後の労働党政権下では永住ビザが発給されたが、2012年以降は難民が急増し、入管施設に送られるように。13年に保守側に政権が移ると、難民を押し返す政策が始まり、施設の

入所者によっては、出所時期も分からない状況となった。昨年5月に政権を奪還した労働党は、難民対応を一部見直し、同政策開始前に入国した難民約1万9000人に永住ビザを認めると発表した。

対象者でパキスタン出身のハミッド・アフメドさん(36)は、政策転換を喜ぶ。10〜12年にかけてイスラム主義組織・タリバンからの招集令状を受けたというアフメドさんは「メンバーにはなりたくないが、断れば身の危険がある」と考え、国外脱出を決めた。ブローカーに相談した際は、豪州ならば受け入れてもらえると言っていたが、豪州に到着した13年には対応が変わっていた。入管収容所で約1カ月過ごしたのち、仮の労働ビザを取得。これまで同ビザを更新し、宅配の仕事などをしてきた。「私はラッキーな方だ。狭い収容所で何年も過ごす人もいる」

ただ、豪州はこれを機にボート難民を受け入れるわけではない。ホガースさんは小型ボートで不法入国する移民を強制退去させられる英国の新法案にも触れ、「世界的に難民に優しくない流れになっていく」とため息をつき、「日本は？」と尋ねてきた。「もつと悪いかも」と説明するのは気が重い。思わず、ホガースさん以上の大きなため息が出てしまった。